

## 「落語の世界」

1月21日午後、「開かれた学校づくり協議会」主催の「新春おもしろ落語」が、本校体育館で行われた。仮設の高座には三遊亭兼好師匠と、その弟子の二枚目・三遊亭兼矢さんに上がっていただき、落語を披露していただいた。ここ数年は人数制限を設けての開催であったため、制限なしの開催は久しぶりだ。100名近くの地域の皆様が集まり、落語を楽しんだ。

一人で何人もの役を演じ分けながら、物語を展開していく落語。噺（はなし）の最後にオチがあるから落語といわれる。使う道具と言えば扇子と手ぬぐいぐらい。落語には様々な噺があるようで、面白おかしく笑える滑稽噺や、泣ける、聞かせるということに特化した人情噺、幽霊やお化けが出てくる怪談噺など。同じ噺でも噺家によって、雰囲気はぜんぜん違うものとなるという。

三遊亭兼好師匠のお住まいは地元千住で、お子様は本校の卒業生だ。その縁で、10年以上にわたり、このような落語会を開催していただいている。師匠の噺を聴いていると、いつの間にかその世界に引き込まれ、そして笑いに包まれる。それが落語の魅力である。そんな師匠の話し方には、われわれ教員も学ぶべきものが多いと思う。授業中に聴き手である生徒をこれだけ引き込むことができたなら、生徒の学習意欲はもちろん、授業の好きな生徒がたくさんできるように思う。

今回、師匠には二つの演目を披露していただいた。その一つが「佐々木政談」。古典落語で、江戸時代を舞台にした噺である。簡単なあらすじは、町奉行・佐々木信濃守が、市中見回りをしていると、子どもらがお白州ごっこをして遊んでいた。町奉行役の子どもの裁きに驚き、親子ともども、奉行所に出頭させる。父親はそんな遊びをするからだ、生きた心地もしないまま、出頭する。ところが奉行は至って上機嫌で、子どもに対して「奉行のこれから尋ねること、答えることができるか」と尋ねる。子どもは「砂利の上では位負けがして答えられないから」と、奉行がいる舞台に上がってしまう。奉行の最初の質問は「夜に輝く星の数を言ってみろ」というもの。子どもは「それではお奉行さま、お白州の砂利の数は？」と切り返すという噺。今年11月、創立20周年の記念行事として、全校生徒に師匠の落語を聞いてもらう予定である。当日、どんな噺をしていただけたか楽しみだ。

1月25日 校長 鈴木 幸雄

◆問題 5からある整数までの和を計算したところ221でした。いくつまでの和を計算したのでしょうか。